
愛の奇跡

リオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛の奇跡

【Nコード】

N2413B

【作者名】

リオ

【あらすじ】

ハヤテさんは、私の大好きな人。ううん、彼は人ではないけれど、私にとって一番大切な存在。彼とお話する特別な時間が大事だった。けど、ある時を境に、私は彼の声を聞くことが出来なくなってしまった。何故？どうして？——貴方の声が、聞きたい……。

(前書き)

規模は小さいですが、この作品は某小説大賞で大賞を受賞させて頂いたものです。非日常的に起こった愛の奇跡を是非一度ご覧下さい。

——私にはずっと、大好きな人がいます。人……うん。人ではないけれど、何よりも大切な、私の——。

——キーンコーン……。

授業終了を告げる鐘の音。

ホームルームが始まって、私はそわそわと落ち着かない。

——早く、早く終われ！

先生の話しは毎回長い。いつもこの時間は苛々して、つい、無表情に口を動かす先生を睨んでしまう。

「では、また明日」

「起立！」

生徒代表の礼の言葉を聞く前に、私は

「さよなら！」

と言うと鞆を手に取り教室から駆け出した。

長い廊下に焦れて、階段では足を踏み外しそうになる。慌てて靴を履き替え、門に見える大好きな姿に急いで駆け寄った。

「ハヤテさん！」

名を呼んで、ぎゅっと抱きしめると、長い毛が頬をくすぐる。

顔を上げて、ハヤテさんの綺麗なアイスブルーの瞳を見つめ、口に、ちゅっとキス。それが、私の毎日の学校帰りの日課。

ハヤテさんは嬉しそうに瞳を細め、ハッ、ハッと息を吐きながら尻尾をぶんぶん。

——そう、私の大好きなハヤテさんは……。

「あい！ あんた少しは落ち着きなさいよ！ ……って、また今日もハスキーくんがお迎え？」

友達のさくらが、呆れた様に私の名を読んで、いい子にお座りをしているシベリアンハスキーを指差す。

——そう、ハヤテさんは、うちの犬。

「うん、今日もハヤテさんと帰るから」

「たまにはうちらと遊ぼうって」

「ごめん！ いつでもハヤテさんと遊びたいの」

「何それ」

やっぱり私は呆れられて、ハヤテさんの隣に並んで学校を後にした。

いつも、ハヤテさんと歩く帰り道。人通りが少ないこの道は、痴漢や変質者多発スポットで。それを心配したハヤテさんは、毎日欠かさず迎えに来てくれる。

けど、ある日を境から、私は寂しくて仕方ないの。

「ねえ、ハヤテさん。今日は一緒に喋りしてくれる？」

問い掛けた言葉に返ってくるのは、ハヤテさんの息遣いだけ。

一年前から、私が十五歳になった日から、ハヤテさんは、お喋りしてくれなくなった。

” あい、この道は危ないから、これから毎日俺が迎えに行くからな”

この道で言ってくれたハヤテさんの言葉が、私の頭の中で響く。

でも、声を忘れてしまいそうだよ……。

ハヤテさんは、私が産まれる前から、今と変わらない姿でいて。みんなはすごい長生きね、なんて言うけど、私は何かハヤテさんは特別なんだと感じていた。

私が小さい頃は、遊んでくれたり、優しい声で慰めてくれて。ハヤテさんは確かに私達と同じ言葉を、私だけに話してくれていた。

なのに。

「どうして、お喋りしてくれないの……？」

――夜。

夕飯を終えて、私は自分の部屋に戻った。ハヤテさんを連れて。明かりも点けず、ベッドに腰掛けると、ぎしっと軋む音が鳴る。ハヤテさんは私の足元に丸くなって、顔を私に向ける形でうずくまった。

私とハヤテさんは、暫く見つめ合う。何も変わらないハヤテさんなのに、その閉じた口から発せられる声は、聞こえない。

「やっぱり……何も言ってくれないんだね」

じわり、自分の瞳が濡れていく感じがした。ハヤテさんが驚いた様に瞳を丸くした時、私は初めて自分が泣いていることに気が付いた。

「ハヤテさん……寂しいよ、悲しいよ……。私のこと、嫌いになっちゃったの？ だから、話してくれないの……？」

ベッドから崩れ落ちる様に、私はハヤテさんに抱き着いた。震える腕できつく抱きしめて、濡れる頬を柔らかなたてがみに擦り付ける。

「ハヤテ……さん……っ」

嗚咽を繰り返し、零れる涙は止まらない。

「私、ハヤテさんが、大好き……！ ずっと一緒にいたいのだから……嫌いに、ならないで……」

途切れ途切れでも、伝えたい言葉を精一杯振り絞った。

絡み付けた腕にいつそう力をこめて、ハヤテさんに縋り付く。その時、微かにハヤテさんがぴくりと動いて。瞬間、私は強い力で引き込まれ、抱きしめられた。力強い、腕に。

「え……」

私がぐっと押し付けられているのは、逞しい胸板。背中に回され

た腕は、確かに人間のもの。

恐る恐る顔を上げて、潤む瞳で見たものは。

グレーの長めの髪をした、端正な顔立ちの男性。その顔に映える、美しいアイスブルーの瞳。

「――ハヤテ、さん？」

私が見間違えるわけがない。その瞳は、間違いなく。

ハヤテさんの……。

「……嫌ってなんか、いない」

懐かしい、ハヤテさんの声。

――ああ、間違いないんだ。この人は、ハヤテさんなんだ。

「俺も、あいが大好きだ。だけど……」

「……だけど、何？」

私は抱きしめられたまま、ハヤテさんを見上げている。ハヤテさんは辛そうで。顔を私から背けて、横の壁を睨みつけているみたい。

「ずっとは、一緒にいられない。だから……」

――一緒に、いられない……？

「どうして！？ そんなの嫌！ 私はずっと、ハヤテさんの側にいる！」

ぼろぼろと涙が零れ落ちて、隙間なく頬と触れていた、ハヤテさんの胸が濡れる。だから、私がどれだけ泣いているのかハヤテさんには凄く伝わるだろう。

「いられないんだ……。ずっととは……」

悲痛な、震えるハヤテさんの声。

ハヤテさんも悲しんでいるの？ なら何故、一緒にいられないの――？

「俺は……あいが産まれた時、あいから感じた暖かく優しい空気が、直ぐに大好きになって、いつも、側にいた」

ハヤテさんは、ゆっくり語り出す。今、更に強く抱きしめられた私は身動きがとれず、ハヤテさんの顔を見上げることが出来ないから、表情は分からない。

「ずっと、あいの心地良い空気に触れていたくて、俺は、あることを強く思う様になった」

「あること……？」

「俺は、人間じゃない。人間のあい比べて短命な、ただの犬だ。だから、長く生きたい……あいと同じ時間の流れで歳をとり、生きて行きたいと」

優しくも悲しいハヤテさんの声が、私の心に染み渡る。初めて聞いた、ハヤテさんの気持ち。

こんなことを思っていてくれたなんて。

——嬉しかった。

「俺の、そんな小さな願い……俺にとっては最大の願いを、神は叶えようとしてくれたのか。俺は、人間で言う六歳くらいから、あいと同じ時間で歳をとるようになったんだ。その時から、人間の姿にも……」

——神様が、ハヤテさんの願いを叶えてくれた……？

人間のハヤテさんは、確かに二十歳前後に見える。

「じゃあ、ずっと一緒にいられるじゃない……っ？」

私がそう言っても、ハヤテさんは首を横に振るだけ。

——どうして？

「最初は嬉しかった。あいと、ずっと一緒にいられるんだ、と。けど、普通の犬が人間と同等に生きたら、ただの化け物だ」

「そんなの私は気にしない！ ハヤテさんは化け物なんかじゃ……！！」

化け物なんかじゃない。言い終わる前に、私の唇は塞がれた。いつもキスしてる時の感触と違う、ハヤテさんの唇。暖かくて、柔らかい、人間の唇に。

「……あ」

そしてゆっくりと唇が離れた時、見えたハヤテさんの顔は、悲しそうに笑っていた。

「あい、俺は君を愛してしまった。主人としてではなく、優しい、

あいに惹かれて……。あいは、いつか恋人を作り、結婚して、家庭を持つだろう。俺は、それを見ながら生きて行くことなんて……。耐える自信が、ないよ」

「ハヤテさ……」

「俺は最低だ。あいの幸せを1番に望んでいるはずだったのに。弱い、駄目なペットだから……。あいの幸せのために、俺は……。いない方がいいんだ」

ハヤテさんは、私の大好きな瞳から涙を流した。アイスブルーが溶けた様な、美しい涙。

——ハヤテさん、違うよ。ハヤテさんは、間違ってるよ……。

「私は、ハヤテさんがずっと一緒にいてくれなきゃ、幸せになんてなれないよ……」

反応を待たずに、私はハヤテさんの首に腕を巻き付け、勢いよく抱き着いた。

たてがみは、絹糸の様な繊細な髪に変わっていて。いつもよりもくすぐったかった。

「あい……?」

ハヤテさんの声は、混乱していることがよく分かる程に動揺を含んでいた。

「私の幸せは、ハヤテさんと、ずうっと一緒にいることよ。恋人なんて、いらない。ハヤテさんさえいればいい」

遠慮がちに、私の背に腕が回される。触れているだけの様な、抱きしめ方。

「好き……大好き。この気持ちは、ハヤテさんと同じものよ……」

びくつ、とハヤテさんの身体が揺れる。それを合図に、私はハヤテさんと視線を合わせた。ハヤテさんはただ啞然として、私を見ていた。

「私は、ハヤテさんを愛してる。ずっと、昔から……」

「あい……!」

私は再び、ハヤテさんの腕の中に引き戻された。強く、激しい愛

に包まれて。額や瞳、唇に、キスの雨が降る。

私は、今までにない、大きな幸せを感じた――。

「ハヤテさん、高校を卒業したら、一緒に暮らそう？　そして、ずっとずっと一緒にいるの……」

「あい……俺は、君とずっと一緒にいて、いいんだな……」

「――うん！」

ずっと、一緒――。

――キーンコーン……。

学校の、チャイムの音。いつもの様に、私は駆け出す。

門の前にちょこんと座って、私を待つ、愛しい人の元へ。

「ハヤテさん！」

がばっと抱き着いて、キスを一つ。

変わらない、幸せな毎日。いつも通る帰路も、何も変わってないけれど、並んで歩く私達は、前とは違う。

「ハヤテさん、大好き」

「俺も、大好きだよ」

笑い合って、愛を交わして。

私達は輝く幸せな未来に向かい、確かな足どりで、いつも一緒に、歩いて行く――。

END

（後書き）

読んで頂きありがとうございました。伝えたかったのは、何よりも強い深い愛情。それを少しでも感じて下さっていたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2413b/>

愛の奇跡

2010年10月8日15時29分発行